

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成21年10月5日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 京都大学文学研究科

職 名 教授

氏 名 赤松明彦

事業区分	平成21年度・シンポジウム等開催助成		
事業内容	「第14回国際サンスクリット会議」の開催		
開催期間	平成21年9月1日 ~ 平成21年9月5日		
開催場所	京都大学百周年時計台記念館ホール、会議室、および文学研究科講義棟		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有(アブストラクト集、プログラムなど)		
会計報告	事業に要した経費総額	飲食・宴会経費を除いた額)	23,229,488 円
	うち当財団からの助成額		1,500,000 円
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 日本学術振興会、三菱財団、全学経費、運営費交付金、参加費	
	経費の内訳と助成金の使途について		
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)
	外国人招へい旅費	9,448,220	559,070
	会場費	1,882,125	0
	通信運搬費	119,972	63,480
	印刷費	4,860,600	276,250
	謝金	2,472,620	0
消耗品費	1,453,152	0	
国内招へい旅費	682,720	0	
若手研究者旅費等補助	203,860	203,860	
者雑費(原稿校正・データ処理費、手数料等	2,106,219	397,340	
合 計	23,229,488	1,500,000	

成果の概要 / 赤松明彦 (京都大学文学研究科・教授)

第14回国際サンスクリット会議は、平成21年9月1日(火)より9月5日(土)の間、京都大学百周年時計台記念館の大ホールおよび3国際交流ホールをメイン会場とし、文学研究科講義棟の3教室も使って行なわれた。組織委員会の構成は以下の通りであった。

組織委員長 徳永 宗雄(京都大学名誉教授) **名誉委員** 松本 紘(京都大学総長) Hemant Krishan Singh (駐日インド大使) **国際委員** V. Kutumba Sastry (国際サンスクリット学会会長、Sampurnananda Sanskrit University)、Ram Karan Sharma (国際サンスクリット学会前会長) John Brockington (国際サンスクリット学会事務局長、University of Edinburgh)、Bruno Dagens (国際サンスクリット学会会計、University of Paris 3)、井狩 彌介(国際サンスクリット学会理事、京都大学名誉教授) **国内組織委員会委員** 服部正明(顧問、京都大学名誉教授) 赤松明彦(京都大学) 荒牧典俊(光華女子大学) 永ノ尾信悟(東京大学) 榎本文雄(大阪大学) 小川英世(広島大学) 桂 紹隆(龍谷大学) 後藤敏文(東北大学) 斎藤 明(東京大学) 高橋孝信(東京大学) 土田龍太郎(東京大学) 藤井正人(京都大学) 丸井 浩(東京大学) 八木 徹(大阪学院大学) 矢野道雄(京都産業大学) 横地優子(京都大学) 吉水清孝(東北大学) 和田壽弘(名古屋大学) 渡瀬信之(神戸夙川学院大学)
事務局： 赤松明彦、藤井正人、横地優子、梶原三恵子、志田泰盛

海外から招へいされた各部会の責任者は、以下の通りである。

Ashok Aklujkar (University of British Columbia, CANADA)、Hans Bakker (University of Groningen, the NETHERLANDS)、Nalini Balbir (University of Paris 3, FRANCE)、Yigal Bronner (University of Chicago, USA)、George Cardona (University of Pennsylvania, USA)、Donald R. Davis (University of Wisconsin-Madison, USA)、James L. Fitzgerald (Brown University, USA)、Peter Flügel (SOAS, University of London, UK)、Dominic Goodall (École Française d'Extrême-Orient, Pondicherry Centre, INDIA)、Arlo Griffith (École Française d'Extrême-Orient, Jakarta Centre, INDONESIA)、Jared S. Klein (University of Georgia, USA)、Helmut Krasser (Institute for the

Cultural and Intellectual History of Asia, AUSTRIA)、Christopher Minkowski (University of Oxford, UK)、Patrick Olivelle (University of Texas at Austin, USA)、Noel Sheth (Jnana-Deepa Vidyapeeth, INDIA)、Mark Siderits (Seoul National University, KOREA) Gary Tubb (University of Chicago, USA)、Dominik Wujastyk (University of Vienna, AUSTRIA)。

今回の国際サンスクリット会議の成果として主なものを4点を以下に述べる。

1) 過去最大規模の国際会議を開催し、日本のサンスクリット学、ひいては人文学の国際的にも極めて高く評価されるべき現状と実績を、広く内外に知らしめることができたこと。

今回の国際サンスクリット学会は、その規模において過去最大のものとなった。事前登録者数は750名にのぼった。正式登録者は488名で、そのうち発表招待者は129名、審査を経た発表参加者は238名、発表はせずに正式参加登録した者は121名であった。この他に、同伴での参加者が40名ほどおり、また当日参加した日本人参加者や学生の数も相当数にのぼったから、優に500名をこす学会となった。海外からの参加者は、正式登録者だけで343名、35の国からの参加があった(別表参照)。なかでもインドから参加者が90名近くあったことは特筆に値するであろう。従来、日印の学术交流は必ずしも十分になされて来たわけではない。とりわけ人文学の領域ではそうであったが、今回は、インド文化の核であるサンスクリットにかかわる国際学会で、その文化伝統を保持する多くのインド人学者(パンディット)が、同じアジアの日本におけるサンスクリットにかかわる学問の実際を目の当たりにして、文化的にも強く印象を受けたであろうことは間違いなく、今後の日印の文化交流にも及ぼす効果は大きいと考えられる。そのことは、開会式に駐日インド大使が出席され、また駐日インド総領事であるヴィカース・スワループ氏(現代インドを代表する小説家、アカデミー賞作品賞受賞作『スラムドッグ\$ミリオネア』の原作者)が、何度もこの学会に足を運び、なかんずく歓送晩餐会の席では、この学会全体への講評を行ない賛辞を惜しまなかったということからもうかがうことができるだろう。もちろん、このことはインドに関してのみ言えることではなく、欧米各国からの参加者にも、日本のサンスクリット学、ひいては人文学のレベルの

高さ、質のよさ、若手研究者の熱意について、深く印象を与えたものとなったことは間違いない。このことは、学会終了後にもらった参加者からの多くの賛辞からも、十分にうかがえることである。

2) 会議では、サンスクリット学を基盤にした、人文学、社会科学の諸分野にわたる 367 の研究発表が、15 の部会、2 つの特別部会において行なわれた(添付のプログラムおよびアブストラクト集を参照)。その発表内容のレベルは高く、いずれも良質の発表であった。その内容は、各分野における最新の成果を示すとともに、インド的文明の諸相を様々な観点から明らかにして、人類の文明の歴史の理解に対しても新たな見地を数多く提供するものとなったこと。

本学会における発表希望者は、招待発表者を除いて、すべて事前の審査を受けなければならなかった。384 名が発表要旨を事前に提出したが、そのうち 255 名が審査に合格、129 名が不合格であった。おおよそ三分の一が審査段階で落とされたことになる。この審査は、極めてフェアに行なわれ、提出されたアブストラクトに基づいてのみ行なわれたので、いわゆる学界の重鎮でも不合格になっている例がある。一方、各部会では、テーマを限定したパネルが編成された。そこでの発表者の多くは、そのテーマ別分野の最先端の研究者によって組織され、多くが発表者として招待された。その数は 130 名ほどである。それらの成果は、いずれ報告論文集として公刊される予定であるので、そのいちいちについてここで述べることはできないが、いくつかについてその成果を報告しておく。

1) 第 4 部会(アーガマとタントラ)におけるパネル「仏教タントラとシヴァ派タントラの関係」では、現在ポンディシェリーの研究を中心にプロジェクトが進められている「初期タントラ研究」における最新の成果のいくつかが報告された。特に、この分野をリードしている Ronald Davidson、Dominic Goodall の報告は、インドにおける仏教の密教の起源とヒンドゥー教の関係について考察する上で、極めて重要なものとなるものであった。

2) 第 8 部会(科学史)におけるパネル「医者と患者 前近代南アジアにおける文献に基づいて」は、ウィーン大学の Karin Preisendanz によって組織され

たものであるが、ヴェーダおよび以後の医学文献の分析を通じて、「患者」、「病人」、そして「医者」というもののイメージの形成について、インド的な文脈から論じられた。それは、「アジア的医学」、ひいては「医学」そのものについての新しい見方を提供するものとして注目すべきパネルとなった。

3) 第9部会(仏教学)におけるパネル「インドの宗教 哲学における聖典の権威と護教論」は、インド仏教を中心に、それをとりまくインド宗教・哲学をも視野にいれて、聖典がいかにして成立し、さらにそれがドグマとしてどのように確立して行くのかをテーマとして組織されたパネルである。11の研究発表は、仏教およびインド哲学の諸派における「聖典」の問題を扱って、現在の学界における標準理解を示した。

4) 第11部会(哲学)におけるパネル「インド哲学の歴史記述と時代区分」は、いわゆる「インド哲学史」の枠組みに対する再検討を企図したものである。ただし、めざされたのは、統一的な理論枠組みの構築ではなく、インド哲学を構成している各学派、各理論などの個別の事例をもとにして、まずは時代区分を設定してみようとする試みであった。11の研究発表は、個別的な学派や宗派、理論を扱い、インド哲学史の時代区分に新たな知見を拓くことを試みた。

以上の他にも、第1部会(ヴェーダ学)や第3部会(叙事詩とプラーナ)でも、テーマ別の発表が行なわれ、最新の成果の発表が続々と行なわれていた。また、第2部会(言語学)は、全体のレベルが極めて高かった部会として、国際的にも高く評価されている。

3) 若手研究者の国際学界へのデビューの最良の場となったこと。

本学会で発表した若手研究者(PD、OD および大学院博士課程在籍の日本人)の数は、39名である。各部会の主宰責任者は、当該分野の第一人者であり、各部会の参加者の多くもまたその分野において第一線で活躍している研究者である。そのような場で研究発表を行なうことは、インド学、サンスクリット学、インド仏教学を日本の大学で専攻した有為な若手研究者・学生にとって、デビューの最良の機会となったことは間違いない。各部会における若手研究者・学

生の発表者数は以下の通りである。

第1部会 7名、第2部会 2名、第3部会 0名、第4部会 4名、第5部会 1名、第6部会 1名、第7部会 1名、第8部会 2名、第9部会 7名、第10部会 1名、第11部会 8名、第12部会 2名、第13部会 0名、第14部会 2名、第15部会 1名

第1部会（ヴェーダ学）、第9部会（仏教学）、第11部会（哲学）における若手研究者・学生の発表者数の多さが顕著であるが、これは、日本の大学におけるサンスクリット学の現状をよく反映したものである。今後期待されるべきは、サンスクリット学そのものの日本における発展であるが、今回の学会は、その契機となるものであることが期待される。これもまた成果の一つであろう。

4) 民間レベルでの日印文化交流を実現できたこと。

各部会における研究発表の他に、京都大学百周年時計台記念館の大ホールにおいては、連日各種の催しが上演された。今回の学会には、インド政府派遣団として21名のサンスクリット学者(パンディット)の参加があったが、彼らは、各自の研究発表の他に、サンスクリット劇、サンスクリットによる哲学討論会、サンスクリット詩の即興競技会に加わり、現代に生きるサンスクリット文化の一端を人々に示した。これらの催しは、いずれも来聴自由で一般の人々に公開されたが、古典がどれほど深くインドの現代社会に伝承され、受容されているかというありさまを如実に示し、その力強さに、聴衆は強い印象を受けたと思われる。これを見た聴衆は、インドの現代を理解するためにも、サンスクリット文化の理解が不可欠であることを理解したはずである。また、オリッサの古典舞踊と民族舞踊が、日本人の学生の群舞も交えて、上演された。さらに、ヒンディー語を学ぶ日本人学生による、ヒンディー語劇「夕鶴」の上演もあった。この劇を見た人々 世界各国からの学会参加者、とりわけインドからの参加者は、誰もが深く感動すると同時に、おそらくは日本人とインド人との間にある、ある種の感性的な親和力を深く感じとったと思われる。これらの催しの上演を通じて、民間レベルでの文化交流が実現したこともまた、本学会の成果の一つである。

別表 国別の参加者数内訳（ただし正式参加登録者のみ）

インド	(8 6 人)
USA	(5 1 人)
ドイツ	(3 5 人)
英国	(2 5 人)
フランス	(2 3 人)
オーストリア	(2 0 人)
イタリア	(1 3 人)
スイス	(1 3 人)
韓国	(1 0 人)
カナダ	(9 人)
オランダ	(9 人)
オーストラリア	(6 人)
フィンランド	(5 人)
デンマーク	(4 人)
タイ	(4 人)
ハンガリー	(3 人)
ノルウェー	(3 人)
スウェーデン	(3 人)
ベルギー	(2 人)
クロアチア	(2 人)
ポーランド	(2 人)
ロシア	(2 人)
台湾	(2 人)
中国	(1 人)
チェコ	(1 人)
香港	(1 人)
インドネシア	(1 人)
イラン	(1 人)
イスラエル	(1 人)
メキシコ	(1 人)
ルーマニア	(1 人)
シンガポール	(1 人)
スロヴェニア	(1 人)
ヴェトナム	(1 人)
日本	(1 4 5 人)